

インカ帝国によるコンチューコス領域北部の支配

南 智博*

キーワード

インカ帝国、コンチューコス領域、タンブ、インカ道、行政センター

目次

- | | |
|-------------------------------|-------------------------|
| I はじめに | IV 調査結果 |
| II 文書資料から明らかにされている知見 | 1 調査概要 |
| 1 インカ帝国の支配 | 2 コンチューコス市～タブラチャカ河 |
| 2 アンカシュ県高地の地理的概要とインカ帝国当時の領域分布 | 3 タブラチャカ河～ワンドバル |
| 3 コンチューコス領域の状況 | 4 ワンドバル～マシュゴンガ山 |
| III インカ帝国期のアンカシュ県高地に関する考古学的知見 | 5 プラサ・デル・インカ周辺 |
| 1 タンプ | 6 マシュゴンガ～トゥクトゥバンバ湖とその周辺 |
| 2 インカ帝国期のアンカシュ県高地の遺構 | V 考察 |
| 3 本研究の視座 | VI おわりに |

I はじめに

インカ帝国とは南米大陸アンデス地方において、かつて現ペルー共和国南高地クスコを首都として栄えた広大な国家である（西暦1450頃～1532年）。その最盛期における範囲はエクアドルやコロンビア南部を北端として、南端はチリ・アルゼンチン北部にまで及ぶ広大なものとなっていた。首都とインカ帝国各地はインカ道と呼ばれる道路網で結ばれていた。その道沿いにはタンブ（タンボ）（*tampu*（*tambo*））（宿駅）と呼ばれる行政施設がインカ帝国全域に配置され（フォン・ハーゲン 2024[2015]: 281）、タンブの中には倉庫やウスヌという儀礼用の基壇を備えているような行政センターと分類される大規模なものもあった（図1）。以下、本稿ではインカ帝国の行政施設のうち小規模なものに限ってタンブと表記する。スペイン人による征服で滅亡したインカ帝国については当時の物的痕跡が所々残されている一方、征服前後のアンデスを生きた人々に

よる記録も残されており、考古学研究・文献研究の両方からインカ帝国像を明らかにする試みがなされてきた（渡部 2024: 51–56）。

コンチューコス領域はペルー共和国北部に位置するアンカシュ県高地のパリヤスカ郡（*Pallasca*）、コロongo郡（*Corongo*）の村や町を含む範囲に広がっていた（Vidal Small 2024: 40–41）。北限はタブラチャカ河（*Tablachaca*）で、南はサンタ河、タンブのあったパリアチューコまでである（図2）¹。この領域はインカ帝国期にはワイラスとワマチューコという大きな領域に南北で挟まれた重要な領域であったにも関わらず、記録もほとんど残されておらず、当領域のインカ帝国の施設についてはほとんど明らかとなっていない。特に、コロongoより北からワンドバル市より南にかけての範囲には南北に現代の道路が通っておらず、町も建設されてこなかったという歴史的背景からこれまでの当地での調査が困難であったことが考えられるであろう。本稿の目的はこうしたコンチューコス領域北部のイン

* 南山大学大学院人間文化研究科人類学専攻

¹ 具体的には17の現代の町が含まれていた領域であり、総面積は3307.43km²となっている（Espinoza Soriano 2013[1974]: 546）（図3）。



図1 インカ帝国全体図と主な行政センターとコンチーフコス領域の大まかな位置
(渡部 2024: 104-105, 図2-17より作成)

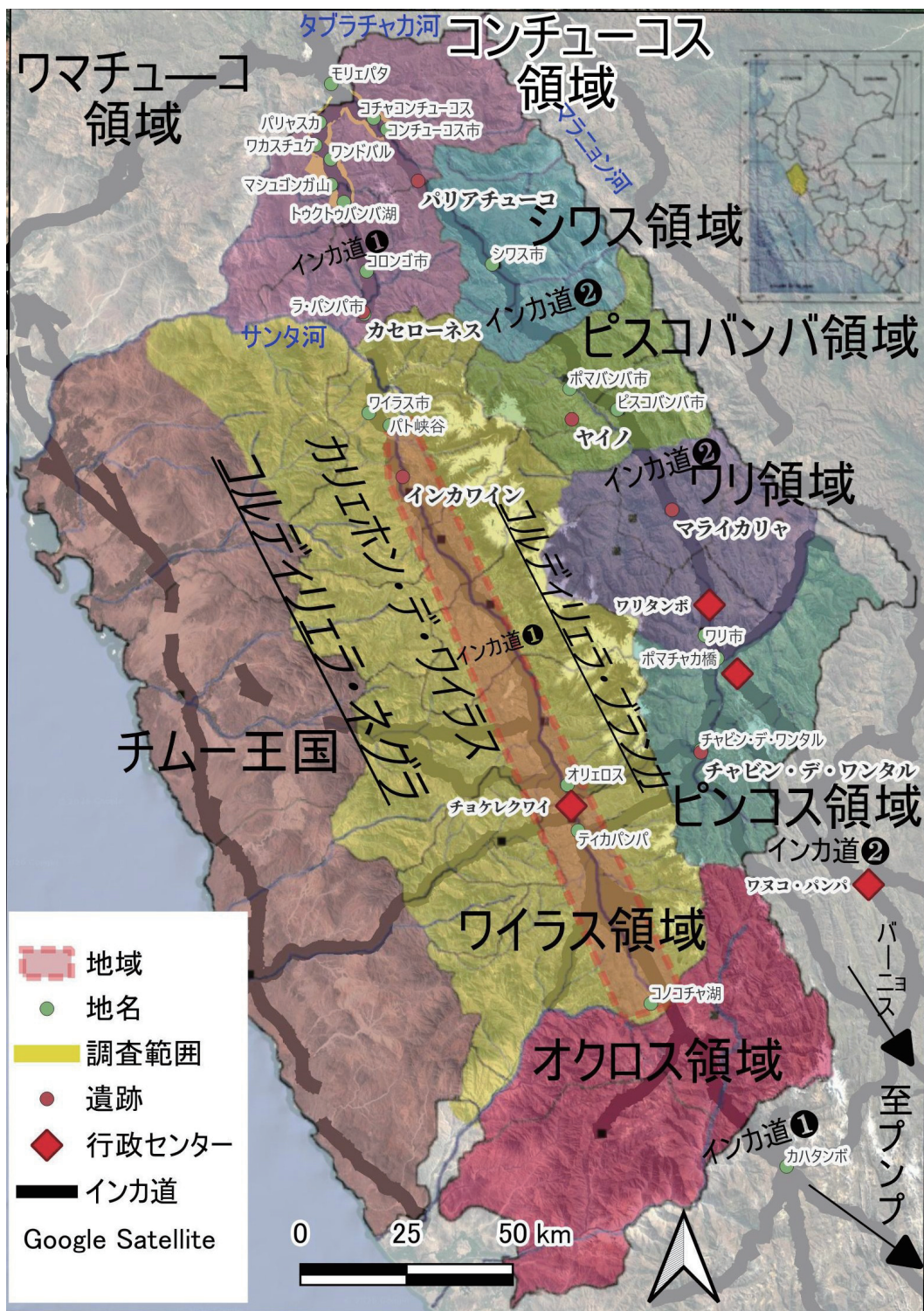


図2 アンカシュ県の領域分布図

2つの→はその先にあるプンプ遺跡で合流する
(Ibarra 2016: 185, Figura 2 を用いて QGIS より作成)

(Pachacamac) まで南下した彼は、この領域およびカリェホン・デ・ワイラスのインカ道を通っており³、当時、ここでは多くの家畜が飼育されていたと記録している (ヘレス 2003[1534]: 99–102)。

次に、当領域の巡察記録からの情報を見ていく⁴。コンチューコス領域の巡察は1543年に行われており (Espinoza Soriano 2013[1974]: 545–565)、当時1901人の貢納者が確認された。コンチューコスの人々はスペイン人征服者フランシスコ・デ・ピサロの支配に抵抗しており、1539年にフランシスコ・デ・チャベスによる徹底的な弾圧に遭っている (シエサ 2007[1553]: 445)。その際に人口が非常に減少していたとされるため、インカ帝国期にはさらに多くの人々が居住していたと考えられている。

コンチューコス領域はポマコチャチ、ヤナマンゴ、コルカリヤスという3名のクラカの下にあるそれぞれのワランガによって構成されており、それぞれの合計人数が分かっている (表1)。それぞれのワランガには約20～30のリヤクタ (*llacta*) (当時の集落) が含まれていた (表2～4)。これらのリヤクタは1572年のフランシスコ・デ・トレドによる集住政策 (レドゥクシオン: *Reducción*) によっていくつかの町にまとめられているため、現代までその名前が残っているものはほとんどない (Espinoza Soriano 2013[1974]: 546)。ポマコチャチのワランガについてはカラプライという名前が記載されていたが、他2つのワランガ名は不明であった。

すぐ北のワマチューコでは4つのワランガがあった

こと (Topic and Topic 2013: 19)、南のワイラスには12のワランガがあったことを考えると (Pärssinen 1992: 327–338)、1543年当時、鎮圧によって人口が減少していたとはいえ、コンチューコス領域における人口は周囲の領域に比べて少ないものであったことが窺える。

ポマコチャチの治めるワランガであるカラプライに属するリヤクタにはコロongo、ヤンタコン、ウルコン (ウルコス) といった現代でも存続している町や村、そしてピンチョスの位置であると思われるウィンチウス (*Winchus*) 湖が含まれるため、このワランガの地理的な範囲はコンチューコス領域南東部に位置していたと考えられる (Espinoza Soriano 2013[1974]: 557)。他方、ヤナマンゴのワランガにはタウカ (タオカ)、アンコス (アングス) といった現代でも存続している町が含まれ、こちらはコンチューコス領域南西部に位置していたと思われる (Espinoza Soriano 2013[1974]: 557)。

従って、残されたコンチューコス領域北部は、3人目のクラカであるコルカリヤスのワランガの地理的範囲にあり (図4)、本調査の対象範囲はここに相当すると想定できる。実際、コルカリヤスの管轄下にある村々のリストにはワンドバルの北のプカ、コチャコンチューコスの北東のティラコ (ティラゴ) といった現代でも存続している集落が含まれている (Espinoza Soriano 2013[1974]: 557) (表4)。ただし、このコルカリヤスの管轄下にある村々のリストにはカバーナも含まれているため、コルカリヤスのワランガの地理的範囲は西にも及んでいたことであろう。

表1 1543年の巡察時におけるコンチューコスのワランガ

ワランガ名	クラカ名	リヤクタ数	合計人数
カラプライ (Carapuray)	ポマコチャチ (Pomacochachi)	21	425
—	ヤナマンゴ (Yanamango)	26	789
—	コルカリヤス (Colcallax)	31	687
	合計	78	1901

(Espinoza 2013[1974]: 546, 549より作成)

³ 彼はコンチューコス領域南部にあるコロongoにおいて宿泊し、ここはワマチューコの領域に属していたとしているが、これはエルナンド・ピサロの思い違いであったとされている (Espinoza Soriano 2013[1974]: 547)。

⁴ 巡察記録とはスペインによる征服後に、征服に際して功績を挙げたものに対して一定の土地の先住民 (インディオ) を割り当てるエンコミエンダ (*encomienda*) という制度を運用するにあたって、その土地の人的状況を把握することを目的に行われた調査に基づく記録である。

もともとコンチューコスの人々はフランシスコ・ピサロ (Francisco Pizarro) のエンコミエンダの管轄下にあったが、彼の死後、当時の総督であったクリストバル・バカ・デ・カストロ (Cristóbal Vaca de Castro) が征服の功労者でありながら生活に困窮していたベルナルディーノ・デ・バルデラーマ (Bernardino de Valderrama) とルイス・ガルシア・デ・サンマメス (Luis García de Sanmamés) 両名にこの領域の人々を分配することを取り決めた。その再配分にあたって、ワヌコ市民であったクリストバル・ボンセ・デ・レオン (Cristóbal Ponce de León) に命じて行われたのがこの巡察である (Espinoza Soriano 2013[1974]: 549)。

表2 ポマコチャチ管轄下の村々

ウルコス (Urcos)	ニイスカ (Ñisca)	カニイケ (Cañique)
ビンチョス (Vinchos)	グアリャ (Gualla)	スントウイ (Suntuy)
グオロヤ (Guoloya)	チャキ (Chaqui)	コロongo (Corongo)
スコチャチャ (Sucochacha)	ミカ (Myca)	アルパコト (Alpacoto)
ヤンタコン (Yantacon)	ナモス (Namoz)	リャカリャス (Llacallax)
イリャス (Yllax)	タポカ (Tapoca)	アルパス (Alpas)
ロカス (Rocas)	パコス (Pacox)	ララグアシ (Lalaguasi)

(Espinoza 2013[1974]: 557より作成)

*アミは現在でも確認できる地名

表3 ヤナマンゴ管轄下の村々

タオカ (Taoca)	バラコチャ (Paracocha)	パリャキス (Pallaquis)
オロンド (Orondo)	チュキケ (Chuquique)	アングス (Angos)
レケレケ (Lequeleque)	リャポコ (Llapoco)	コアス (Coas)
スンビス (Sumbix)	アヤングレ (Ayangore)	チャミーリャ (Chamylla)
カチャ (Cacha)	ウチュコラングレ (Uchucorangore)	チャキルケ (Chaquilque)
アランケ (Aranque)	インパ (Ynpa)	アニイナラ (Aniynara)
カンガヤ (Cangaya)	トゥイコポ (Tuycopo)	チュキグアラポ (Chuquiguarapo)
コチャカ (Cochaca)	ガニコ (Ganico)	ピナバンバ (Poinabamba)
チャコリャ (Chacolla)	エンカバンバ (Encabamba)	

(Espinoza 2013[1974]: 557より作成)

*アミは現在でも確認できる地名

表4 コルカリャス管轄下の村々

グアクアリイバンバ (Guaquallibamba)	アパリャス (Apallax)	カンチャーカ (Canchaca)
スンビス (Sumbix)	グアチャオ (Guachao)	パカチャリン (Pacacharin)
カビチャレ (Cavichale)	チュチョアス (Chuchoas)	グァンガリイ (Guangalli)
バンバマルカ (Bambamarca)	アタカ (Ataca)	パカス (Pacax)
ティラゴ (Tirago)	ポナマルカ (Ponamarca)	カバーナ (Cavana)
ポロコンチューコ (Poloconchuco)	チュカーナ (Chucana)	カインサパ (Caynzapa)
ヤナカルカ (Yanamarca)	チャンチャ (Chancha)	ポコッシ (Pocossi)
チャラマルカ (Chalamarca)	マリャパ (Mallapa)	カブカポ (Cavcapo)
チュムラ (Chumla)	キチュアス (Quichuas)	プカ (Puca)
グアカリャ (Guacalla)	カラポリ (Calapoli)	ニロス (Niros)
スマーナ (Sumana)		

(Espinoza 2013[1974]: 557より作成)

*アミは現在でも確認できる地名、濃いアミは現在でも確認できる遺跡

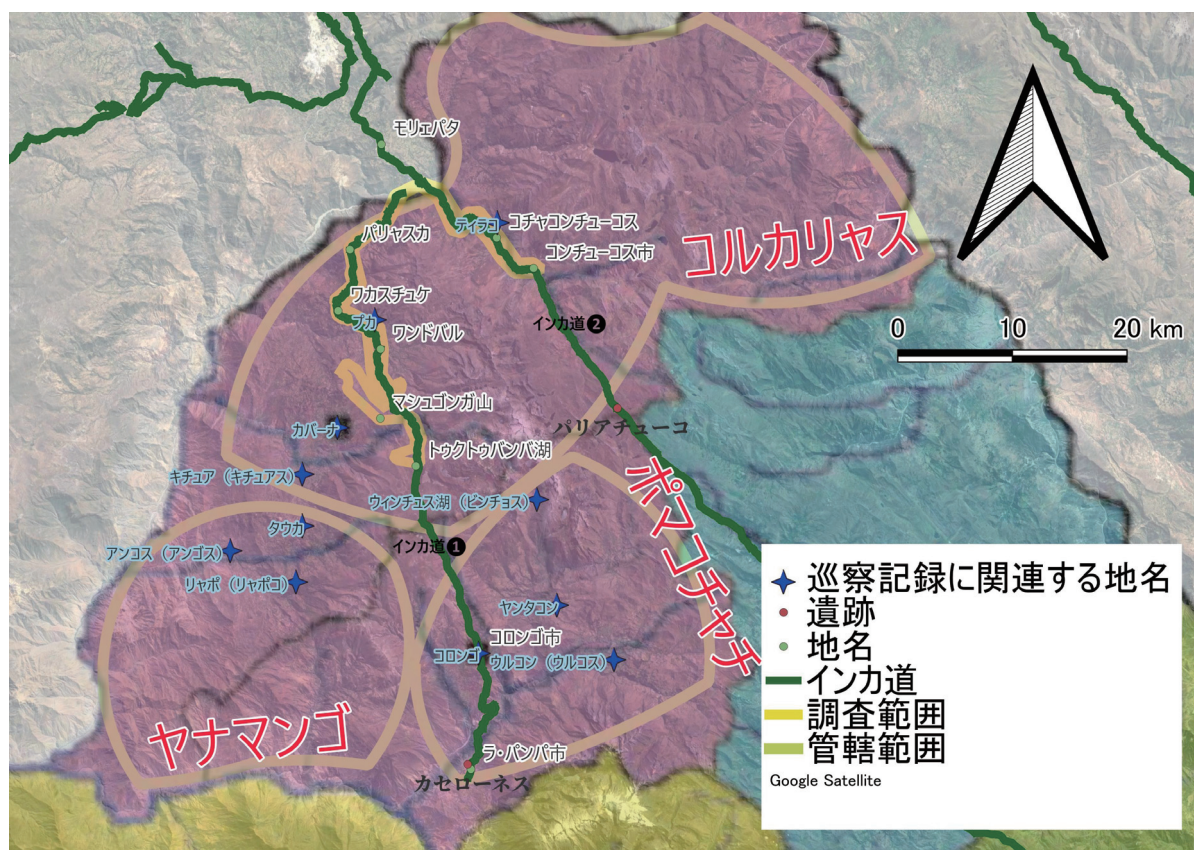


図4 コンチュエコス領域の暫定的なそれぞれのクラカの管轄範囲
(QGIS より作成)

ここからコルカリヤスのワランガの地理的範囲は他の2つに比べて広がったことが考えられる。人口はヤナマンゴの管轄のワランガよりも少ないが、リヤクタ数は一番多く、面積は圧倒的に他の2人のものに比べて広く想定できることから、相対的に人口密度は他のクラカのワランガの地理的範囲に比べて、低かったことがここから窺える。

Ⅲ インカ帝国期のアンカシュ県高地に関する考古学的知見

1 タンプ

インカ帝国の行政施設であるタンプにはインカ帝国内の移動者に宿泊施設を提供し、物資を貯蔵することを基本として祭祀、工芸品生産など様々な機能があったとされる (Hyslop 1984: 279–280)。その建築にはイ

ンカ帝国以前の遺跡を再利用したものからインカ帝国が直接、土着またはインカ帝国の様式あるいはそれらを融合したものに従って建設したものまで様々なものがある (Hyslop 1984: 280–281)。それゆえに、タンプには必ずしもインカ帝国の特徴的な建築が認められるわけではない。道沿いの大きな施設のない地域に建設される宿泊・貯蔵のみの機能が認められるタンプは典型的なタンプとみなされる⁵。また、典型的な行政センターは平坦地や緩やかな傾斜地にあるとされる (Hyslop 1990: 272)。

2 インカ帝国期のアンカシュ県高地の遺構

インカ帝国期のアンカシュ県高地には、南北に並走する2本の主なインカ道があったことが知られている。それらは南東にあるフニン県のポンプ (Pumpu) 遺跡で分岐し、一方のインカ道①はリマ県北部を通

⁵ この典型的なタンプには①3または4つの建造物で広場を囲ったカンチャ (Cancha, Kancha) (Gasparini and Margolies 1980[1977]: 181–193; Hyslop 1990: 16–17)、②精巧な石組み (Hyslop 1990: 12–16)、③台形の開口部 (Gasparini and Margolies 1980[1977]: 320–323; Kendall 1985: 25–39)、④切妻屋根を持ち開口部が広場に向いている長方形建造物 (Gasparini and Margolies 1980[1977]: 196–219; Hyslop 1990: 18–19)、⑤2列の石壁 (Gasparini and Margolies 1980[1977]: 309–310)、⑥貯蔵スペースという7つの特徴が認められることもある (Hyslop 1984: 281–292)、これらはインカの建築の特徴としてもよく挙げられるものである。

て、アンカシュ県のカリエホン・デ・ワイラスに入る。インカ帝国のいくつかの施設を通りつつレクワイ市付近ではインカ帝国の行政センターであったチョケレクワイ（Choquerecuay（プエブロ・ビエホ（Pueblo Viejo））を通り（Tantaleán y Maestro 2004[2003]: 445–456; Bernabé 2017: 47–63, 2023: 92–124）、パト峡谷を迂回して、かつてはもう一つのインカ帝国のセンターであったとされるワイラス市に入る。ワイラスの領域を抜けると、コンチューコスの領域に入りラ・パンパ、コロongoを経て、そのままトゥクトゥバンバ湖、マシユゴンガ山東麓、ワンドバル、ワカスチュケ、パリヤスカへと北上し、ラ・リベルタ県へ至る。

もう一方のインカ道②は、プンプからワヌコ県西部に入り、インカ帝国の一大行政センターであるワヌコ・パンパを通して（Morris and Thompson 1985）、コルディリエラ・ブランカの東側にあるピンコスの領域に入る。ここではインカ帝国の行政センターであったピンコスタンボ（Pincostambo）（タンボ・デ・ソレダー（Soledad de Tambo））が確認されている（Chirinos y Ríos 2018: 32–47）。北上してポマチャカ橋を渡ると、ワリ領域におけるインカ帝国の行政センターであるワリタンボ（Huaritambo）がある（Kattia 2019）。続いて、マライカリヤのタンブ、ピスコバンバ市、シワス市、パリアチューコのタンブ、コンチューコス市を通る形でコルディリエラ・ブランカの東側の高地を北に縦断する（Espinosa 2002: 83–107）。これらのインカ道①②はアンカシュ県とラ・リベルタ県の高地の県境であるタブラチャカ河付近で合流していた⁶。両道はプンプ～タブラチャカ付近に至るまで、全く接続がなかったわけではなく、所々に互いを結ぶ道が整備されていた（南・吉川 2025: 16–18）。

アンカシュ県高地南部においては先述のようなインカ帝国の行政センターが報告されているが、北部においては、インカ帝国の痕跡はあまり知られていない。

コルディリエラ・ブランカの東側の高地においては南北全域でインカ道②の調査が行われてきた（Espinosa 2002: 83–10）。シワスやピスコバンバはポマの記述やインカ帝国期の切り石やウスヌといった当時

の痕跡が確認されていることから（Espinosa 2002: 94）、インカ帝国期には行政センターとして機能していたと考えられている。なお、ポマバンバ付近にあるレクワイ文化（Recuay：西暦200～600年頃）のヤイノ（Yayno）遺跡ではインカ帝国の幼児供儀の儀礼であるカパコチャの痕跡が確認されており（Lau 2019: 159–179）、インカ帝国以前の文化の遺跡をインカが再利用している事例もある。

一方、アンカシュ県高地のインカ道①のカリエホン・デ・ワイラス以北の範囲ではペルー文化省による簡単な報告や（Instituto Nacional de Cultura 2004: 51, 52）、カバーナ周辺のインカ帝国の遺跡が簡単に紹介されているのみである（Lau y Wegner 2023）⁷。

3 本研究の視座

コンチューコス領域では古くから山頂部の防御的な集落を特徴とするレクワイ文化などの人間の活動痕跡が残されている（吉川 2025: 99–109）。この領域は西暦700～1000年頃にワマチューコなど外部の文化と接触し、コルディリエラ・ブランカの西側ではワリ帝国が流入してきた一方、東側ではワリ帝国の影響を受けてこなかったという文化的な背景を経て後期中間期に入り、最終的にインカ帝国に組み込まれることとなる（Lau y Wegner 2023: 1）。

コンチューコス領域はアンカシュ県高地の中でもワリ帝国の影響を受けた部分と受けてこなかった部分を併せ持つ特殊な領域であり、インカ帝国の支配もこうした事情に合わせて、他のアンカシュ高地の領域とは異なる様相であったことが仮説として考えられる。本研究は古代アンカシュ県高地社会をインカ帝国がどのように統合・支配していったかについての理解に寄与するものとなっている。

IV 調査結果

1 調査概要

筆者はコンチューコス市～タブラチャカ河～トゥクトゥバンバ湖を対象として、その範囲にあるインカ道

⁶ 2つのアンカシュ高地のインカ道の北の具体的な合流点としてラ・リベルタ県のモリエパタが考えられている（南・吉川 2025: 15）。なお、モリエパタのあるワマチューコの領域については、現代のワマチューコ市に行政センターが設置されており、倉庫などインカ帝国による統治の痕跡が確認されている（Topic and Topic 2013: 17–43）。

⁷ この道沿いにはインカ・ワイン（Inca Wain）遺跡や、ラ・パンパ遺跡（La Pampa）のカセローネス（Caserones）（Terada 1979: 39–44, 92–96, 181–183）などが報告されている。インカ・ワインについてはインカ帝国以前の時代の遺跡、カセローネスについてはインカ帝国の影響を受けた土着の集落であり、インカ帝国が直接敷設した施設ではないと考えられた（南・吉川 2025: 19–22）。



図5 調査範囲
(QGIS より作成)

やその周辺遺跡の踏査を行った (図5)。既に登録されている遺跡やインカ道のルートをペルー文化省が公開しているデータ (GeoGPSPeru) を参照するとともに、グーグル・アースによって衛星写真から確認できるインカ道沿いにある遺跡と思しき構造物を確認した。それらのデータをハンディ GPS (Garmin 社 GPSMAP i67) とそのスマートフォン用アプリケーション (Garmin Explorer) に登録した。調査期間は2024年7月14日、8月14~17、19、20、22日の8日間である。以下に、確認できた遺跡について、インカ道の区間に分けて記述する。GeoGPSPeru により遺跡名が分かるものについてはその名前を表記しているが、そうでないものに関しては、遺跡に番号を付与した。先行研究により言及されている遺跡はマシュゴンガとチュカーナのみである (Lau et al. 2023: 52; Lau y Wegner 2023: 1)。

遺跡の時期比定についてであるが、まずアンデス全

体が単一国家としてまとまっていたことを示す行政効率を重視したインカ道沿いの平地の施設、あるいはインカ帝国の建築的特徴が窺える遺跡をインカ期の遺跡とした。そして周囲との緊張関係から防御性の観点で、山頂に築かれたインカ帝国の特徴が窺えない遺跡をレクワイ文化または後期中間期の遺跡として解釈した (Lau 2016: 102, 161)。

2 コンチュューコス市〜タブラチャカ河

この区間はすでに何度か調査が行われている (Espinosa 2002: 83-91)。インカ道はコンチュューコス河に沿って敷設されており、現代の車道とほぼ重なっている。コンチュューコス市を北に出て1km ほど車道を辿って河を渡ると、山の西斜面にインカ道が続いている。3.2km ほど斜面の道を歩くとコチャコンチュコスの村にたどり着く。この村からは河の右岸沿いの車道にインカ道が4.3km ほど続き、そこから山の西斜面



図6 遺跡1の外観



図7 遺跡1の航空写真

線により遺跡の概形を示している。



図8 遺跡1南の部屋の外観



図9 遺跡1南の部屋の北の壁龕



図10 遺跡1南の部屋の入口の壁龕



図11 遺跡1 北の部屋裏の囲い

沿いの道がタブラチャカ河へと至る。この区間の総距離はおおよそ15kmである。この道が川沿いの道路から山道に入る場所で川岸に新たに構造物が確認された。本稿ではこれを遺跡1とする（図6、7）。

① 遺跡1

標高：2706m

位置：8°14'02.96" S 77°54'31.49" W

面積：225.63m²

粗石と泥モルタルで造られた南北に伸びた長方形の構造物である。南北端には4～5m四方の正方形の部屋があり、2つの部屋の間の約30m弱を外部へ湾曲する石壁で囲っている。この囲われた空間の内部の南寄りの部分には部屋状構造物がある。壁の高さは1mほどであったが、切妻壁は1.6mほどの高さがあった。この部屋では入口と南の切妻壁に壁龕が確認された

（図8、9、10）。北の部屋の南の仕切り壁と東の囲い壁の角を囲うように0.5mほどの高さの壁から成る1mほどの囲いがあった（図11）。建築からインカ帝国期のものであるとは断定できないが、水辺の近くにあること（渡部 2020: 10-11）、そして対岸にはインカ・ブンゴ（Inca Bungo）というインカの遺構が確認できる遺跡があるとされることから（Espinosa 2002: 84）、これらを併せてタンブであった可能性が高い。密な植生に阻まれ、詳細な遺跡の形状を確認することができなかった。

この遺跡1の背後の山は崖が切り崩されており、山道への進入が不可能であった。遺跡1から約5km北に進むとタブラチャカ河にたどり着き、橋を渡った北岸すぐ東には構造物らしきものが視認され、これを遺跡2とした。



図12 タブラチャカ河北岸にある遺跡2

② 遺跡2

標高：2178m

座標：8°12'03.55" S 77°56'32.97" W

面積：不明

タブラチャカ河の対岸に位置し、現地調査を行うことができなかったが、遠隔観察によれば整然と石のブロックを並べて泥モルタルで固めているようであり、西側にアクセスとなる開口部が設けられている（図12）。コンチューコス河とタブラチャカ河の合流点の傍にあること、そしてインカ帝国期にはタブラチャカ河がワマチューコとコンチューコスの境目であったことから、ここには当時も橋が架けられていたことが推測され、この遺跡はインカによる通行を制御する施設であったという可能性が考えられる（Hyslop 1984: 315-316）。

このように以前の調査では報告されていなかったインカ期のものと思われる遺跡を2つこの区間で確認できた。

3 タブラチャカ河～ワンドバル

標高2116mのタブラチャカ河南岸からカリェホン・デ・ワイラスに向かうインカ道は峻急な山の北斜面に続いており、シンドル（Shindol）の教会の西側、パリヤスカ（標高3133m）、ワカスチュケ（標高3254m）まで傾斜を登り、ワンドバル河に向かって下った後、川を越え、南に山の斜面を再び登ってワンドバル（標高3048m）の町へと至る形で続いている。この区間のインカ道の総距離はおよそ20.3kmである。一部車道に入る部分はあるが、そのほとんどは車道から外れた砂利道である。

まずタブラチャカ河から467m進むと、地域の農業区画に入り所々道が石垣に囲われている。この区間で最初に見つけられた遺構はタブラチャカ河から4kmほど進んだところにあり、本稿では遺跡3とする（図13）。



図13 遺跡3



図14 遺跡3より67m 南西にある門を構えた建造物

③ 遺跡3

標高：2666m

座標：8°14'07.84" S 77°58'25.74" W

面積：不明

密な植生に阻まれ、遺跡の全容を把握することは不可能であった。この構造物は粗石で積まれていたようである。80cmほどの高さの石の基壇の上に構造物が並んでいるのが植生の中から垣間見える。67m南西の方向に門を構えた建造物が確認された（図14）。表面からは土器片が確認されたが、どの時代のものであるかは分らなかった。道沿いにあることからタンプであった可能性がある。

その後インカ道を4kmほど進むと、パリヤスカ市にたどり着く。この町を抜けると、車道から西に外れた山の西斜面の森林地帯にインカ道が続いてワンドバルへと至る。

ここでは道の所々にいくつか単一の部屋状構造物が確認されたが、それらは基本的に粗石積みでできており、土器は発見できなかった。インカ帝国には帝国内の情報や物資の迅速なやり取りを行うチャスキ（chaski）と呼ばれる飛脚が配置されていたとされ（Hyslop 1984: 304-305）、これらの小規模な遺構はチャスキの待機する場所であったチャスキ・タンプであったとも考えられるが、その形態については議論が定まっていないため（Hyslop 1984: 305）、そのように断定することは難しい。



図15 オゴパンパ貯水池の航空写真



図16 オゴパンパ貯水池外観南向き

4 ワンドバル〜マシュゴンガ山

町を南に抜けると、インカ道はチャウスマル (Chahuismal) 溪谷の植生内 (3.52km) を進み、高度を上げながら広大な平原へ続く。さらに2.21km 緩やかに傾斜を登ると、マシュゴンガ山の東麓 (標高3932m) に達する。マシュゴンガ付近にまで来ると、インカ道の周りに粗石積みの囲いが確認された。こうした囲いではスペイン人征服期当時にヘレスの見た家畜が飼われていた可能性がある。

同溪谷を抜けた地点にオゴパンパの貯水池が位置する (図15)。

④ オゴパンパ貯水池 (Reservorio de Ogopampa)

標高：3572m

座標：8°21'35.85" S 77°58'11.65" W

面積：約602.44m²

ペルー文化庁によって登録されているが、全容はよくわからない。小高い丘に囲まれた窪地を利用して貯水空間が形成されていたと推測される。ただし、調査時点において内部に貯水は確認されなかった (図



図17 プラサ・デル・インカの航空写真



図18 プラサ・デル・インカの外観北向き



図19 プラサ・デル・インカの西側の壕で見つかった骨

16)。標高が高く、放牧に適した場所であることや、ここからインカ道を北に365.83m 進むと、プラサ・デル・インカと呼ばれる特殊な形の広場があるため、インカ帝国当時はこの広場での人間の活動の際の家畜の係留場所であった可能性が考えられる。

⑤ プラサ・デル・インカ (Plaza del Inca)

標高：3628m

座標：8°21'47.76" S 77°58'06.24" W

面積：8690.74m²

三角形に近い六角形の形で壕を囲って造られている広場である (図17、18)。壕の深さは80cm 程であり、動物骨が散見された (図19)。広場の東端は壕が閉じられており、その上に、4m×5m、高さ80cm ほどの石材とモルタルで造られた小さな部屋状構造物があ